

I Tatsuzo Sone & Seichiro Chujo

II Yoshiro & Yoshio Taniguchi

III Fumihiko Maki

IV Functional Architecture

慶應義塾の建築

I 曾禰達蔵と中條精一郎による建築

三田キャンパスの図書館旧館は、義塾創立50周年を記念して、1912（明治45）年に建てられました。ネオゴシック様式の優美な姿は、曾禰達蔵と中條精一郎の共同事務所である曾禰中條建築事務所の設計によるものです。曾禰は、明治維新後に政府が招いたお雇い外国人のジョサイア・コンドルに建築を学んだ第一期生のひとり。三菱の社員となり、コンドルに協力して現在の丸の内オフィス街の元となる建物群を設計しました。義塾の建築を手がけたのは、三菱退社後に後輩の中條と事務所を構えてからです。

図書館旧館は同事務所の代表的な建築の一つであり、重要な文化財に指定されています。外壁の大時計は、右手の八角塔とのデザイン的なバランスを取るために、曾禰が配置したといわれています。1923（大正12）年の関東大震災は持ちこたえましたが、1945（昭和20）年の空襲では外壁を残して内部

1875（明治8）年に開館した三田演説館をはじめ、義塾のキャンパスには歴史的価値の高い建築が多数あります。関東大震災、第二次世界大戦時の空襲に耐えて永らえている建築もあれば、21世紀にふさわしい意匠と機能を持つ新しい校舎もあります。

数ある義塾の建築の中から、曾禰達蔵と中條精一郎の曾禰中條建築事務所、谷口吉郎と谷口吉生の親子、そして槇文彦の設計による作品に注目して、明治から現在まで、義塾の歴史を彩る建築群を訪ねてみました。

が焼け落ちる、大きな被害を受けました（4年後に修築完了）。1926（大正15）年に竣工した塾監局（法人本部棟）も同事務所の設計です。隣に建つ図書館旧館の赤レンガに比べると、ベージュの外壁は地味な印象ですが、木々に囲まれたその姿には、歴史を経てきた威厳があります。またキャンパスのほぼ中央、大銀杏の北側に建つ第一校舎は1937（昭和12）年に完成し、以来70年以上にわたり、三田の中心的な校舎として使われています。

他にも、三田の大講堂（1915年竣工、1945年焼失）、信濃町の予防医学校舎（1929年竣工）と病院別館（1932年竣工、取り壊され跡地に3号館竣工）など、明治から第二次世界大戦前までの義塾の建築の多くは、曾禰と中條の設計によるものです。古き時代の義塾の建築物が醸し出すテイストは、この2人が作り上げたものといえるでしょう。



塾監局



図書館旧館
第一校舎

Tatsuzo Sone & Seiichiro Chujo



大講堂



病院別館



予防医学学校舎



II-1 谷口吉郎たにぐちよしろうによる建築

次いで義塾の建築を語る上で欠かせないのが、谷口吉郎です。東京工業大学の助教授だった1932（昭和7）年から40年以上にわたり、数多くの建築に携わってきました。

谷口が義塾のために最初に設計したのは、1937（昭和12）年に完成した**幼稚舎本館**（P.6の写真）です。昭和初期におけるモダニズム建築の傑作で、彼の初期の仕事を代表する重要な作品です。それ以降、校舎や病棟、あるいは**慶應義塾発祥の地記念碑**など、さまざまな設計を手がけています。

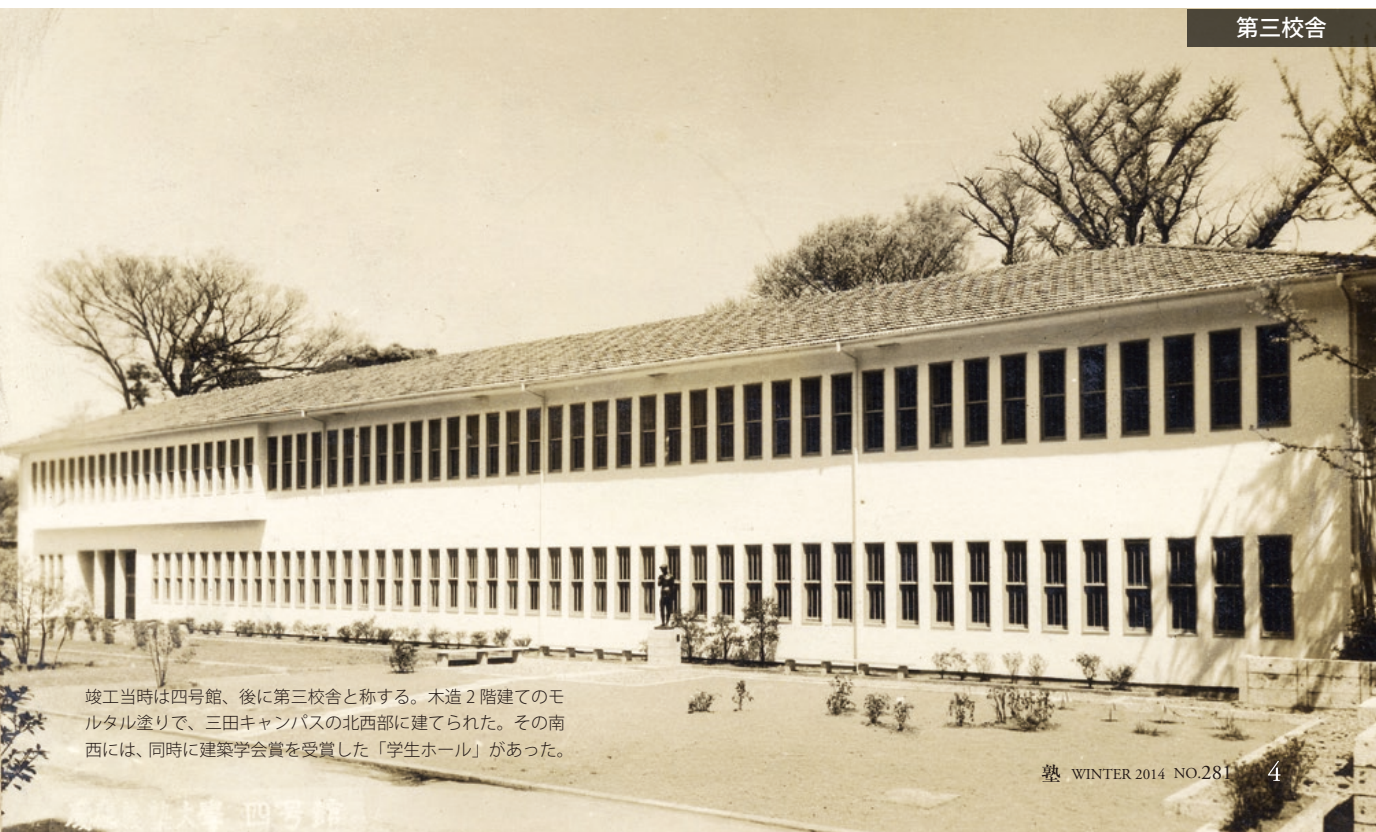
第三校舎（三田）

三田の**第三校舎**（四号館）は、戦後間もない1949（昭和24）年の竣工。同じく谷口が設計した**学生ホール**とともに、この年の日本建築学会賞作品賞を受賞しました。1967（昭和42）年に研究室棟建設のために取り壊されましたが、写真で見ても、縦長の窓の配列が鮮烈なイメージを与え、戦後の焼け跡に新しい空気を吹き込む、清らかなデザインです。「なにしろ薄いオカユをすすり、木炭自動車走っていた時代だから、木材もガラスも配給品である。そんな建築資材の乏しい中で、（中略）『第三校舎』と『学生ホール』が落成した」（谷口吉郎著作集第3巻『慶應義塾と私』より）と当時の事情を回想しています。また校舎の前庭にブロンズの「青年像」を配置し、学びの場に建築と美術のコラボレーションを実現させました。



第三校舎前庭に設置されていた「青年像」は、菊池一雄の作品で第1回毎日美術賞を受賞。いったん姿を消しましたが、三田キャンパス西校舎と研究室棟の間の小広場に復活しました。

第三校舎



竣工当時は四号館、後に第三校舎と称する。木造2階建てのモルタル塗りで、三田キャンパスの北西部に建てられた。その南西には、同時に建築学会賞を受賞した「学生ホール」があった。

日吉寄宿舍

幼稚舎本館と同じ1937（昭和12）年に日吉キャンパス南側に姿を現したのは、鉄筋コンクリート3階建て、北・中・南の3棟が並ぶ**日吉寄宿舍**です。各棟に広い食堂と談話室が設けられ、個室には床暖房を完備。また、別棟には「ローマ風呂」の異名を持つ円形浴場があり、崖下の絶景を楽しみながら入浴できました。眺望を考慮した緩い扇形の建物配置も特色のひとつで、斬新なこの建築は、一躍注目を浴びました。

しかしながら、このモダンな寄宿舍は、時代を先取りした機能的な居住性ゆえに、時代の波に翻弄されることになりました。第二次世界大戦末期の1944（昭和19）年には海軍の連合艦隊司令部に接収され、上級将校の宿舎として使用されました。さらに戦争終結後は、進駐軍の宿舎となり、浴場はダンスフロアに改築されてしまいました。現在は修復を経て、南寮だけが、寄宿舍として使用されています。

戦後復興においても、谷口の貢献は絶大でした。戦災と進駐軍の接収による施設の不足は深刻で、新築設計の多くが彼に任せられました。右ページで紹介した三田の第三校舎をはじめ、**第二校舎（五号館）、第二研究室、信濃町のは号・ほ号病棟**、一貫教育校では**普通部日吉校舎、中等部校舎や女子高等学校第一校舎**など、現存・非現存を問わず、谷口が手がけた建築は全塾に及びます。

前出の『慶應義塾と私』によると、最初に幼稚舎本館の設計を依頼されたとき、当時の担当理事であった横智雄から「塾の建築に魂を入れてほしい」と言葉をかけられたことが強く印象に残っていたようです。弱冠28歳の「建築家の卵」に懸けた横の慧眼は、「義塾建築」ともいふべき、一つのカラーを生み出したといえるかもしれません。

日吉寄宿舍

Yoshiro Taniguchi



II-2 谷口吉生たにぐちよしおによる建築

谷口の没後、彼の事務所を受け継いだのは息子で建築家の吉生（塾員）です。国内では丸亀市猪熊弦一郎現代美術館や葛西臨海水族園、海外ではMOMA（ニューヨーク近代美術館）の増改築リニューアルを手がけるなど、世界的に活躍しています。また、資生堂アトハウスと東京国立博物館法隆寺宝物館は、それぞれ日本建築学会賞作品賞を受賞し、親子二代での快挙となりました。

義塾においては幼稚舎新体育館（1987「昭和62」年竣工）、湘南藤沢中等部・高等部校舎（1992「平成4」年竣工）など、一貫教育校を中心に設計しています。

新館21

2002（平成14）年に竣工した幼稚舎の新館21も彼による作品です。同校では1999（平成11）年の「幼稚舎創立125年」を機に、1学年の学級数を3から4に増やすなど教育体制の変更に取り組みました。不足する普通教室を確保するとともに、教育環境の一層の充実を目指して建てられたのが新館21です。館内には8つの普通教室のほか、舞踊室や理科室、音楽室、食堂などがおかれています。

父・吉郎設計の本館にも通じる、明るく開放的なつくりが特徴で、周囲を掘り下げた半地下に位置する食堂は、天井が高く、ガラス越しに緑に囲まれた気持ちの良い空間が広がっています。約300の座席を備え、2学年が同時に食事をすることが可能です。

本館の竣工と吉生の誕生は奇しくも同じ1937（昭和12）年。65年の時を経て、親子の作品が並び建ちました。



食堂



新体育館



本館（父・吉郎設計）



新館21

Yoshio Taniguchi



日吉図書館

III 横文彦まさふみひこによる建築

図書館新館（三田）・日吉図書館

続いて紹介するのは、横文彦（特選塾員）による建築です。義塾では2つの図書館を手がけています。

三田の図書館新館は1981（昭和56）年に竣工。地上7階地下3階5層建て、収蔵能力は115万冊に達します。その外観には、旧館の八角塔をイメージした意匠が取り入れられるなど、義塾の重要建築に対する敬意を感じ取ることができます。

もうひとつは日吉図書館で、1985（昭和60）年に竣工。地上4階地下1階建てで、設計時の収蔵能力は41万2000冊です。竣工後に「図書館の中でのさまざまな空間体験が、ある種の旅を想起させる」（『新建築』60巻6号／1985年）と語った横はその印象をデザインに反映させています。玄関スロープを栈橋、吹き抜けと階段まわりを甲板に見立てるなど、船のイメージが盛り込まれました。そこには、塾生を乗せて「知の大海」をゆく船と、図書館を重ね合わせる意図があったのかもしれませんが。そのほか、湘南藤沢キャンパス（SFC）の開設にも携わり、個々の校舎の設計にとどまらない、キャンパス全体のランドデザインを手がけました。

「場の記憶」を
アーカイヴ化する

「慶應義塾の建築」
プロジェクト

アート・センター教授 渡部葉子

「慶應義塾の建築」プロジェクトは、一貫教育校を含む塾内建築について、記録資料を作成・保存し、その記憶をアーカイヴ化することを指すプロジェクトです。創立150年を迎えて、新規建築事業に伴う既存建築の解体が始まったことを契機に、アート・センターが所管するノグチ・ルーム・アーカイヴのプランチとして立ち上げられました。

建築資料の蓄積やアーカイヴ化は建築家ベースで行われることが専らですが、本プロジェクトでは、学校という場の記憶をアーカイヴ化するという観点から「ユーズ・マインドの建築アーカイヴ」を標榜しています。すなわち建築を設計した側よりも、むしろ建築を使用し、そこを生活の場とする側の視点を含んだ記録化を試みようとするものです。活動内容としては、調査・撮影等をはじめとした資料作成・蓄積を行い、さらに展覧会、シンポジウム、見学会、ワークショップ、報告書出版などによる発信と情報の共有を図っています。

IV 近年の機能性建築

締めくくりに、最近の建築に取り入れられている最新技術をいくつか紹介しましょう。学び舎である義塾の建築に求められるのは、第一に「安全」、そして「環境」「省エネ」です。

■**免震構造** 三田の南校舎など、全塾のうち7棟で採用。新築に際しては、建物の用途や周辺建築との干渉状況などにより採否を判断します。免震構造でない校舎でも、もちろん耐震基準を満たしています。

■**コージェネレーション** ガス発電の熱を、空調や給湯に利用する省エネルギーシステム。災害時に停電しても、ガスさえ供給されていれば発電が可能です。日吉の協生館、信濃町の総合医科学研究棟、SFCのA館などで導入されています。

■**太陽光発電** イニシャルコストや発電量を考えると経済性は必ずしも高くありませんが、環境負荷軽減という点で社会的に意義の大きい設備です。幼稚園や横浜初等部、日吉の来往舎などに設置されています。

■**アトリウム** ガラスなどの光を通す素材で覆われた大きな空間のこと。日吉の独立館や来往舎では、広い共用部（廊下・階段など）を吹き抜けの半屋内空間にして、太陽光、通風などの自然の力を利用しながら明るさや快適さを保ち、照明や空調のコストを抑える工夫がされています。

■**廃材の建材再利用** 一部ではありますが、廃材の再利用にも取り組んでいます。独立館では解体工事で生じたコンクリート瓦礫の一部をブロック化し、建材として再利用している他、来往舎では基礎工事で掘り返した土砂を床のコンクリート素材として活用するなど、産業廃棄物の削減に努めています。

建てられた時代や設計者により特徴の異なる各キャンパスの建築ですが、たとえば日吉の建築群が、白とアースカラーで統一されていたりするなど、時代を超えて義塾らしさが引き継がれています。



南校舎（三田）



独立館（日吉）アトリウム



独立館 外構



来往舎（日吉）土砂を再利用した床

建築の世界を志し、理工学部で幅広く学ぶ

理工学部 システムデザイン工学科4年

掛 史佳君

さまざまな学びが可能な義塾において、建築を専攻することももちろん可能です。ここでは、理工学部で研究に取り組む塾生に話を聞きました。

研究室でのテーマは、生命化建築

慶應義塾大学には、建築学科はありません。しかし、理工学部システムデザイン工学科（SD）では、建築を志す塾生が多数学んでいます。必要な単位を取得し、卒業後に所定の実務経験を積むと一級建築士試験の受験資格が得られます。

掛史佳君は、SDの4年生。三田彰教授の研究室に所属し、修士課程への進学が決まっています。

「研究室では、生命化建築の研究をしています。建築の生命化って何？と思われるでしょうが、生き物が環境の変化に適応してより快適さを目指すように、建築も環境に適応して快適さや安全を進化させようという研究です。その一環として、いま取り組んでいるのがセンサーエージェントロボットの開発。ペットのように居住者について回り、さまざまな情報を取得し、暑ければ信号を送ってエアコンの温度を調節し、暗ければ照明をつけるなど、ロボットを介在させることで、環境に対応する快適な空間をつくらうとしています。目下、そのロボットにどんなセンサー機能をつければいいのかを研究室のメンバーとともに研究しています」

入学後、いろいろな学びが建築を選ぶきっかけに

理工学部では、1年次は5つの学門、2年次以降は11ある学門のいずれかに籍をおいて学びます。学門で幅広い分野の授



業を受けながら、2年への進級の前に、より細かな専門に分かれる学科を決めます（進学可能な学科は、学門により異なる）。

「大学で何を学びたいのか決まっていなかった私にとって、1年間さまざまな分野の基礎的な知識を学びながら、学科を選べるのは助かりました。また、SDは学びの胃口が広く、2年になってからも制御や環境などいろいろな授業を受け、3年になるときに自分に向いているのは建築分野だと思い決めました。1〜2年の頃に、いろいろなことをかじった経験は貴重です。視野が広くなり、将来もし建築の世界で働くようになったときにも、問題を別の角度から見るができるなど、きつと役に立つと思います」

建築を学ぶには大きく分けて、構造、意匠（デザイン）、設備の3つの系統があり、それぞれに専門の授業があります。

「構造の授業では地震時の建物の揺れを計算し、意匠では戸建住宅や集合住宅の模型を作りました。設備では、有名な建物を例にとり、設備の流行廃りの変遷をたどった授業が印象に残っています。今は空間を気持ちよく感じさせる照明とか、より快適な空間をつくるための設備に興味があります」

義塾の建物では、三田キャンパスの東館がお気に入り。

「大学然とした佇まいが印象的です。理工学部は三田で授業がないと知ったときは、ちょっとがっかりしました（笑）」